

\*\*\*\*\*

一部50円です

\*\*\*\*\*

## 苦勞にかわる発見の喜び

若い時の苦勞は買ってでもせよ、という。買いそびれた人はどうなるのだろう。先日、顔なじみの住職と苦勞の話でもりあがった。「今の偉い人たちに欠けているのは、苦勞した経験だ」という私の意見に、彼は「経験がないから偉い僧侶なんかも、経典の細部の注釈などを引っ張り出してきて、自分の経験の無さをごまかそうとする」と応じる。「経験が無い人の話は、どうしても説得性に欠ける。いくら学があっても経験にはかなわない」（私）。「今の僧侶で苦勞を経験した人は少ない。金に執着する人は多いが、金にならない事には無頓着な人ばかりだ」（彼）。そんな具合の話だった。

ある広告営業職の若い女性の話が面白かった。彼女は、いわゆる「ゆとり教育」の世代で時々常識的な一般教養も自信無げなように見えた。彼女がある店に訪問した時、店主から「うちは、私がプロ野球選手だったから、知り合いの選手たちが多く来てくれるから、広告を出す必要がない」と簡単に断われた。彼女は、野球に興味もなくルールすら知らなかったが、契約を取りたい彼女は、野球の事を調べてはじめて気がついた。野球をしない期間「オフシーズン」があることを。そして、再び店に行き店主に「オフシーズンはどうされていますか？」と尋ねた。店主は「シーズン中に稼ぐからいいんだよ」と断わった。結局、今のところ広告は取れてない。彼女は、こんな感じで毎日20件の飛び込むという。営業の新人にとって飛び込みは厳しいものだ。でも彼女はどこか楽しんでいるように感じた。

私が興味を感じたのは、その小学生のような好奇心を持って営業を楽しんでいる彼女の姿だ。ゆとり教育で育った彼女は、入社当時仕事が出来るかどうか自信はなかったに違いない。しかし、学生時代汲々と勉強していなかった分、余力が残っていたのかもしれない。仕事を通して未知の領域に足を踏み入れ、発見の喜びを見つけているように見受けられた。

今を生きる若者にもさまざまな苦勞があるだろう。受けとめようによっては深刻なストレスにもなる。このストレスの多い窮屈な社会の中で、営業を好奇心でもって楽しみながら飛び込みをしている彼女の姿に、私は新たな生き方を感じた。未知への好奇心が仕事に楽しみを生み出しているのだろう。楽しみは、遊び心を刺激しさらに好奇心を大きく広げてゆく。苦勞と思える仕事を発見に満ちた世界に変えていく。今は、「おもしろい」「楽しい」事をしていく中で成長していく時代なのかもしれない。そんな世代がどんな社会を創っていくのか興味がわいてきたのである。

## 連載 爺捨て山47

梵店主

好きな酒を飲んでいる時にも、何かに追われていたような気持ちが消えない。

せかされて時間切れで、ろくに考えもせず生きてきた、と思えるのだ。金や時間に頭の中が支配され、肝心の事を置き去りにしてきたのではないか。

一度この流れを断ち切りたいと思うのだが、流れていく日々の生活では、立ち止まることは出来そうにない。入院生活でもそれはかなわなかった。

自分の置かれた環境を変えることによつて、悟りの境地が得られるのではないかと、安易に考えていたが、そうではないと考えるようになった。

爺捨て山に籠もれば、過去を捨て新たな心境を見つけれられるのではないかと、という希望を持って、三年余りこの欄を連載してきましたが、四ヶ月間の入院生活を体験した今思うのは、たとえ忙しい生活であっても、仕事や家族と向き合う中で己を失わない姿勢で生きていく事が悟りにつながっていくのではないかと変わった次第です。

ひとまず、この連載は終らせて頂き、次号からは、昨今のニュースで伝えられているように男女の関係が変化しそうです。そのあたりを面白く、山猿さんに「男と女」というテーマで連載をお願いしておりますので、ご期待ください。

これでいいのだ

実はつい先日、転倒して前歯を折るといって怪我をしてしまった。普段から、気をつけているつもりだったが、自分が知らないうちに身体が疲れていたのかも知れない。

最初の数日は、何をしてもつらかった。ご飯を目の前にしても痛みがはしる。

病院で診療や検査を受けるには、いろんな準備がいる。現在までを話さなければならぬ。気持ちには焦る。

早く何とかしてよ。クラツと目まいがする。怪我をしているのに、なぜか涙が一滴も出ないし、人の顔を見るのもイヤ。心まで疲れて渴ききってしまったのだろうか。

これではダメだ。ふと或る日、思い出した。佐藤愛子さんが書かれた『まだ生きている』。この世には、いろいろな人間がいて、それぞれいろいろに生きている、と。

そうだ、「しんどいなあ」と思うけれど、今日も、明日も頑張らなくちゃ、何があっても。

そんな或る日

小学生の頃から親しんだ歌なのに、こころも心に染み入るのはなぜだろう。

「うさぎ追いし 彼の山 小鮒つりし 彼の川 夢は今もめぐりて 忘れがたき故郷」

唱歌「故郷」。民謡発表会に出席してプログラムに目を通すと、必ず最後に全員で合唱して下さい、と書かれている。私は、下手ながらも一生懸命に声を張り上げて歌っている自分に気づき、涙する。

当たり前にあるはずの故郷、緑豊かな大地と青い空、その下で働く人たちの姿。

ありがとう。よく寄って下さった。成人した子供がみんな故郷を後にして都会へとあこがれた傷跡が、あちこちに表れている。

旧家を取り壊され荒地になり、時には雑草が屋根に、天に向かって伸び、何があっても「生きてゆくのだ」と叫んでいるように思える。実弟が来て話す故郷の状況からおもったまま記す。



気分転換も大事

ちよつと坐るとテレビの画面は、いつもと同じ。よし、書こうと鉛筆を持ったものの一向に流れてゆきそうにない。

ねっころがって、マンガを読む。文庫本を取り出す。さらに余裕があれば、美味しいものを食べる。頭の中が、かやくご飯になりながらも気分転換が出来、発想が出てくる。

「もの」「こと」が発見できるのも、そこらへんの何かが動くことによつて生まれてくるものなのか。

電車で幼き子を抱えた母親、何かを求めて泣き叫ぶ子供、口をおさえてなだめている。

大変だなあ。でも、うるさいなあ、と思った。下車駅が近づいたらピタリと泣き声もおさまる。案ずることなし、今までの状況を描きながら自分の気持ちを引き算してみる。

あまり新鮮とは言えないけれど、このひと呼吸も大事ではないだろうか。



俳句

土田 裕

シャワー浴ぶ心の憂さも流すべく  
青梅と言へどほんのり紅を刷き  
節電で日本の夏戻りけり

亡き友の浅き夢見て明け易し  
涼しさや色とりどりの作務衣着て

編集後記

今年の蒸し暑い季節が有り難いと思える。昨年の入院生活を思い出せば、何とも言えない開放感が湧いてきます。おかげさまで、毎月の血液検査の結果も良好で投薬量を慎重に減らしながら回復しております。

新たに、駒田さんの投稿、明石さんの自伝的なサラリーマン回顧録、A Oさんの笑ってはいけませんが、思わず笑ってしまう年金問題などなど。

私はここ数年、まともに本を読んではいませんが、芥川だよりに掲載する皆さんの文は懸命に読んでおります。この読書だけでも、今の社会を理解できると思っております。

今後とも、この冊子をご最頁におねがいします。(嘉)

### ステロイド剤の恐怖

梵店主

入院してから毎日検査が続く。一週間たったころ医局の人事異動で担当医が変わった。外来で担当していた小濱医師が主治医となって、担当医は後輩の平医師になり、美人医師は研究医として研究を目指す、という。

彼女は、ナイチンゲールの本を読み医者になろうと決めた。大学の研修医を始めた頃に、若い女性の患者が筋炎で苦しんでいるのを見て、何とか救う力になりたいと思ったという。その想いを実現すべく臨床医の道を選ばず、研究医となつて未知の細胞分子を研究するらしい。話を聞いても、よっちゃんには、よく分からない世界ではあるが、未婚の若い美人医師の将来を案じた。

よっちゃん「研究は何年やるの？」

彼女「5年間で成果が出るように頑張ります」

よっちゃん「病棟で患者を診る臨床医は研究のヒントを得るためにも、続けたほうがいいよ」

彼女「私も、そう思います。研究室に閉じこもって研究ばかりをしていては、いい成果はでない。病に苦しむ患者さんの

話や病状を見ながら、研究に役立てたい」よっちゃん「えらいなあ、結婚はどうするの？ 経済的には困らないの？」

彼女「そうなんですよ、結婚もしたいし、子供も欲しいし。でも何とかやります」

よっちゃんは、彼女の姿勢をみて、これまでいっていた医師への見方が間違っていた、と思った。金儲けの為に医師になる奴ばかりだと考えていたが、病に苦しむ人を助けるために、原因も治療方法も解明されていない未知なる病原を人生をかけて挑む姿に感銘を受けたのである。

調子者のよっちゃんは、すぐに彼女を励ますファンクラブを作ろうと思った。一年に一度、彼女の研究成果を聞き、ランチを共にし、いくばくかの賛助金を集めるのである。この話を彼女にすると笑っていた。

病棟の看護師や医師にも、ファンクラブの話をしたら、みんな乗り気で参加したいと言った。ある同僚の若い医師は、彼女は私たちと違い、非常に賢い。彼女なら成果をあげられるかもしれない。ノーベル賞は知らないが、教授位にはなれる。彼女は私より年下だが、彼女のファンクラブならよるこんで参加したい、と言った。

新しく担当医になった平医師も「私の卒業した進学校にはいないタイプだ。中高一貫で有名な進学高校で、毎年多くの医学部入学者をだしているが、賢い奴は少ない。学校では受験テクニックをひたすら教えるだけだ。彼女のような人はいなかった」

続けて彼は「僕なんかも決して勉強できた方じゃない。もつと出来る奴はいくらでもいた。そんな同級生は、東大や京大、慶應の医学部にいった。特別賢くなくても医者にはなれますよ」

よっちゃんは、彼の言葉を聞きながら、秀才でなければ医師にはなれない、と思っていた事が嘘のように思えてきた。

勉強が出来なかったという彼は、京都の医科大学を卒業してきているのだから、秀才にちがいないのだが。

主治医から、検査結果が全て出たわけではないが、見切り発車で治療を開始しますと言われた。治療と言っても、投薬だけであるから、よっちゃんは、気楽に考えていたが、いざ始まると薬の威力に負けてしまった。

ステロイド剤を毎日、毎食後飲む。一日で60ミリの錠剤を呑むのである。ステロイド剤を飲むと、免疫力が無くなり感染症になりやすくなる。少しの病原菌にも抵抗力が無くなり病気になるのである。病室から離れる時には、たとえトイレであっても必ずマスクをするように言われた。

この薬の怖ろしいのは、即効性で炎症を抑える効果があるものの、副作用も多く、糖尿病から高血圧、間質肺炎など重症になる危険がいつぱいあったが、よっちゃんが、最初に困ったのは、不眠症だった。夜、寝むれないのである。

### 大阪のおぼはん、ヤクザと化す

私はクレーマーでもヤクザでもない。どつちかっていうと、気の弱い庶民で、別に悪いことをしていません、「すみませ〜ん」と気軽に言い、「どうもどうも（ヘラヘラ）」と腰が低い（異論のある友達もいるかもしれないが、少なくとも本人はそう思っている）。書いていて、自分がイヤになってきたが、今はそこをうんぬんしている場合ではない。

私はヤクザになり、クレーマーになった。いつ？ どこで？ 誕生日の次の日に、年金事務所で。

今年のはじめだったか、年金事務所からお知らせが届いた。「年金やるから手続きにおいて。見込額はコレだけだよ」。簡単にいえば、そういうことが書いてあった。受け取り見込額四十一万二千六百円。一カ月分ではないですよ、一年間分。少ない！ 大学出てから業界の新聞社に勤め、その後、フリーになって、また、別の業界紙でお世話になってと紆余曲折はあったが、ずずーっと、年金は支払ってきた。昔さんが「未納三兄弟」とか言って自分も未納だったりしたことがあったが、私には未納期間はない。

それで、六十になって、年間四十万つて少くないですか？ 仕事がなかったら、この金額でどうやって食べていく

わけ？ と、まあ腹も立ったが、せつかくくれると言ってるのだから、「もらいましよう」と思つて、誕生日が過ぎたところで、そそくさと年金事務所に行った、と思つて下さい。

書類を書いて、窓口に出して、さて手続きをしようと思つたら、担当者がコンピューターを叩いて一枚の紙をくれた。そこに書いてあったことは、停止額・三十五万九千五百円。

「何ですか？ 停止して？」

「いえ、収入があたりですので」

「はああ？」ここから、私はヤクザとなり、クレマーと化した。「はああ？」

という語尾を上げた言い方、私はとても人をバカにした言い方だと思つて、使っている若い連中を内心バカにしていた。「イケズまる出しやで」と。

しかし、支給額五万三千四百五十円（しつこいけど一カ月ではなくて、一年間）に減額され、停止額は消えるだけで持ち越しになるものでも何でもなくて、

通知にも一行もそんなことは書いてなくて、窓口で一方的に「そうなりまして」と言われて、だまつて「あらあら、そうでしたか、どうもどうも、じゃ、よろしく、すみませ〜ん」と言えるか！

「おい、ちよつと、待つたれや、にいちやん！」（これは実際には言うてません。そういう顔と態度ではあつたが）

「ちよつと待つてよ！ それどうい

ことオ？」

「いえ、ですから、アナタさま（本当は名字で呼ばれておりました）の場合、収入があたりですので」

「満額もらつたとしても、年間四十万円。仕事をしていなければ、生活できませんよね？」

「まあ、そうですね」

「仕事をしているから、収入があるから、停止して。しかも、停止額が五万円なら百歩譲つて仕方がないと思えるかもしれないけど、停止額が三十五万

というのはいくらもやん。納得でけん」（ここからは大阪のおばはんである。ヤクザよりタチが悪いかも、だ）

「そうおっしゃいましたも〜」

「おかしいと思わん？ 六〇になつたら、くれるというから營々と払い続け、その年になつたら勝手に停止して。それならそうと、先に言うといてくれなアカンわ。年金やるけど、年間五万円やで、と。誰も払えへんわね」

「いや、それは違います。公的年金は必ずや〜」（ここから長い説明があつた。障害者になつたらナンボくれるとか、そういうことだつたが、ヤクザと化した大阪のおばはんは聞く耳はない。

「払うだけ払わせて、いぎ、そつちが払う側になつたとき、『収入がおありだから』と勝手に停止額を決めてええのん？ しかも、そもその金額が信じ

られんぐらい減つてるのに。これ、国家的な詐欺と違ふのん？」

「まあ、そういうことに〜」

「アンタが個人的にしたことではないことぐらいわかつてるけど、年金でいらんもんいっぱい建てて、結局、カネをドブに捨てるようなこととして、今になって支払われへんって、おかしいんちゃうん？」

ここからが、面白かつたというか呆れたんだけど、担当のお兄ちゃんがこう言つたのだ。

「そうですね、グリーンピアとか、確かにいろいろヒドイですわ」

正直に言おう。私はグリーンピアが厚生年金と関係あるって、知らなかつた。問題になつていたことは知っていたが、郵便貯金がらみかと思つていた。あれも、厚生年金だつたんか！ そりや、受給資格がある人間にも、ウダウダ言つて払わないわけである。責任者、出てこいっていうんじや。

この窓口クンは、多分、善良な人間なのであろう。「お怒りはごもつともなんですけど、アナタさまのケースより、もっとひどいことを僕はいっぱい知っています。何年もかけたのに、受給資格の二十五年に満たなくて支給されないと、奥さんが死んでも、旦那さんの方には一銭の遺族年金もなくて奥さんがかけた分はチャラになるとか。とくに、後

者にこの窓口クンは憤つていた。

「変ですよええ、いまどきは夫婦で所帯を支えているのに」。ああ、多分、コイツの嫁は働いていて、その奥さんが先に死んだら、一銭も入ってこないことを理不尽だと思つているのだろう。だが、私はそれには同情しないゾ。「ふつう、女の方が長生きだし、痩せても枯れても男が女の遺族年金、アテにするなよ」と思つているから。ま、人間、自分のこと以外、痛みは感じない、ピンとこないのである。

当然、私の怒りにピンときていない窓口兄ちゃんは、「ではお話はこれぐらいにして手続きに入ります」と言つたので、ヤクザおばはんはキレた。「待つて！ 私、明日、会社辞めてくるから」。善良なる窓口クンは「そ、それは損ですよ」。知つてるよ、それぐらい！ でも、このまま引き下がるのは悔しいから、「国を相手に訴訟起こすわ」と言つて帰つてきた。それっきり、ほつたら

かしだ。結局、国の方がトクしてることかしらね？ 結局、バカは私つてことですかね？

これだけでも怒り心頭なのに帰り際、窓口クンはそつと溜息をつきながら、「罵詈雑言を浴びせられるのは僕らの仕事ですから」とつぶやいた。私が、いつ罵詈雑言を浴びせたつちゅうんじや。（A O）

## Ｂ級サラリーマン渡世譚 その２ いよいよ輸出部生活が始まる

明石 幸次郎

二年足らずの工場資材課勤務から、8  
1年夏に本社にある輸出本部に転勤に  
なった。営業部隊は第一部と第二部に  
分かれていて、一部は欧米、豪州にあ  
る直営販売会社の営業支援、管理業務、  
中南米への販売を担当していて、3つ  
の課に分かれていた。二部は台湾、タ  
イ、インドネシア、マレーシアの工場、  
直営販売会社の営業支援、管理業務、  
その他東南アジア、韓国、中国、西南  
アジア、中近東、アフリカへの販売を  
担当し、同じく3つの課があった。主  
に一部は先進国を中心のテリトリー  
で、二部は発展途上国という、区分も  
出来た。私が配属されたのは第二部第  
二課という部署で販売会社などがない  
その他全部の国をテリトリーに持ち、  
課長を入れて7人で活動していた。今  
回の異動でB級サラリーマンの私と、  
関東のT工場から入社2年目のJ君と  
言う、私と全く正反対の外見からして  
超A級サラリーマンの2人が増員にな  
った。J君は2年目でありながら、堂々  
とした自信満々の態度と何を言われて  
も飲み込みが早く、誰が見ても仕事が  
出来る雰囲気を見せていた。  
上司になるA課長は40代前半にも関  
わらずスキンヘッドで陰では“禿松”

とか“はげ松ちゃん”と言われていた。  
当時輸出本部は、77年に破綻を食い  
止めるべくS銀行が中心になり、I商  
事に吸収合併されたA産業出身者が8  
人もいた。海外市場を拡大すべく即戦  
力として中途採用をした人材で夫々の  
専門性を期待され、全社で12人位い  
た。A課長もそのA産業の機械本部に  
いた経歴を持ち、元大手商社マンのプ  
ライドを態度と言葉の端々に含んでい  
た。最初に転勤の挨拶をしたら、「お前  
さんは、英語は出来るんやろなあ。そ  
れと、貿易実務は出来るんか？……」  
と、工場から来たとは言え、海外との  
貿易部門に異動するからには、当然、  
語学力と貿易知識をスキルとして備わ  
っているのだなあと言う意味の質問であ  
った。メーカーである会社は全ての人  
材が貿易部門に携わるわけではない。  
況して、当時のK社は国内が中心で、  
輸出比率は10%もなかった。製造、  
設計、購買、経理、人事、労務、総務、  
国内営業、海外営業と部門の役割が  
夫々違い、部門毎に必要なスキルが  
夫々違ってくる。商社は儲けの源泉の  
営業部隊が中心になり、その営業部隊  
の支援に資金管理、人事、物流、総務  
があり、言わば、営業部隊の海外部門、  
海外駐在は花形部署である。

語学力を身につけている訳でもなし、  
今では、輸出比率が65%にもなるの  
で事務系社員全員がTOEICを500点  
以上を取る事を会社が義務付けて、制  
度的なサポートもしているが、当時は  
何も無い。自己研鑽に任せていた。英  
語に関しては、大学の就職活動で、商  
社を第一志望であった関係で、毎日英  
字新聞を半年だけ購読して、必ず社説  
だけは目を通していた。又、幸いにも  
新入社員で配属された本社資材部で海  
外から商社を通さずに直接輸入貿易を  
行っていたので、基礎的な貿易知識、  
海外とのコレポン(当時はテレックス)  
の経験、知識はあった。これもA級で  
なく、B級ではあるが――。

私の顔と本社資材で輸入していたとい  
事で思い出したのか、「そう言えば、お前  
本社資材部にいたなあ。思い出したわ。  
技術部から頼まれて大型機械をアメリ  
カから輸入してくれと言われた時、頼みに行  
ったことあるわ。あの時、お前が輸入して  
くれたんやなあ。そうか、あの時に世話に  
なったんや……。まあ、明石なあ。こ  
の会社の輸出部のヤツは貿易やっている  
と偉そうにしているが、貿易のボの字も知  
りよれへんねん。商社のM社にキンタマ握  
られてんねん。それを分かかってない。メー  
カも直買(メーカーが商社等の力を借りずに  
貿易を行う)やらんと儲かりまっかいな。  
こんな事をあちこちで言うてるから、M社  
の皆から嫌われてんねん。」と下町の神戸  
弁丸出しで自説を述べ始めた。私も資材部  
にいた頃、スキンヘッドのちよつと変わっ  
た落ち着きが無さそうな人が来て輸入を  
頼まれた事を思い出した。リーディングが出  
来るのであれば、A課長が機の引き出しか  
ら「英語」などを引っ張りだしてきて、おい、  
このページ英訳せんかい、と試されたらま  
ずいと咄嗟に思い、話題を勝手に変えて  
「A課長ご出身はどちらですか？」と質問  
したら「俺は神戸や。隣の二課におるT畑  
も同じや。高校も大学も神戸や大学の学部  
も、工学部で一緒や。前の会社も一緒や。  
ワシら途中入社やねん。おい、T畑、ち  
よつと来いや。今度、ウチに来た明石やね  
ん。コイツが本社資材に居た時に、技術部

に頼まれた機械を輸入してくれて助かったんや。メーカーにも直貿の出来る奴がおったんやなあ。」と大きな声でそのT畑さんと呼んだ。仕事を中断させ隣の課から呼ばれてやってきたT畑さんは押しが強そう、見るからに仕事が出来る商社マンといった感じ、かつ、話し方と顔に愛嬌があり、誰が見てもこの人は将来、偉くなるというような雰囲気を見せていた。(最終的には常務取締役になった)私は、このT畑さんを工場時代から知っていた。アタツシケースの似合う元商社マンのエリート輸出部員を憧れと妬みも交えて意識していたし、T畑さんが持ち込んできた1千万円近くを払えという、クレーム問題も、何故か、この人をちよつと試してやろうという反発心と、本社資材からきた人間は工場の生え抜きとは、ちよつとやり方が違う、ということ回りに印象付けたかった想いがあった。私の顔と名前を聞いて「おう、明石久し振りやなあ。お前なあ？ 堺の資材の奴がタイの工場から言われたクレーム会議の席で、行き成り、俺に向かつてタイ向けは間接貿易で、シツパーはM社なので、損害保険も掛けているので、兎に角、M社にクレームノウテイス(クレームが発生したことを保険会社に通知すること)を出さして下さい、と言いつたんや。(続)

## 猛虎一声、山月高し

大江雉兎

今回のお題は、とある漢詩の一句。虎が猛々しく咆哮する、夜空には天高く月が輝くのみ……といったあたりがその情景である。では、この詩句だけを見せられると、どんな印象を持つだろう。中島敦の『山月記』が描く絶望的な孤独を思い浮かべる人もいるだろうし、中にはメガホンを振りまわして「六甲おろし」を歌いだす人もいるはずだ。断片的な句から導かれる印象には正解や不正解はない。たとえ原典の内容と重なっていなくても、受け手の直感に閃いた世界こそが正解なのである。

原典の描くところは、栖霞寺(南京にある仏寺、五世紀建立)での冬の夜、話疲れて黙っていたところ、沖天の月を背に遠吠えする虎の声が聞こえてくる云々というもの。北宋時代(十一世紀)の禅詩なので悟りの境地を象徴的に詠んだものという方向に持つて行かねばならないのかも知れないが、詳細はよくわからない。わからないながら、この詩句に興味のアンテナが反応したのは、詩句の一人歩きが著しいように思われたからである。

この詩句が日本にもたらされたルートないし時期は確定不能である。わかっているところを挙げれば、三菱財閥

の創始者・岩崎弥太郎が好んで揮毫したという事実がある。岩崎弥太郎に関して、数年前のNHK大河によって、やたら尖った性格という人物像が刷り込まれている。その正否はともかく、「猛虎一声」の句を好んで揮毫したということだけから推測するなら、常におのれを大きく見せようとする高ぶりが胸中に渦巻いていたように感じられる。もちろん弥太郎が原典どおりに詩句を理解し、そして悟りの境地を穩やかに求めていたとする解釈が成り立たないわけではない。しかし同じ詩の中で他の句ではなく、あるいは同じ趣向をもった他の禅詩からの引用ではなく、この「猛虎一声」の句を選んで書かしていたとすれば、煮えたぎる心中を想像する方が適っている気がする。

「……他方に責任の一部分たりとも担はしむることは本意ではない。善かれ悪かれ余一人で引受け仕事し行きたき考である。猛虎一声山月高の気合を以て此の寅年は進むべき信念である」

誰の文章かは、しばらく伏せておくとして、強烈な使命感のもとで「猛虎一声山月高」が使われているのがわかる。たまたま寅年だったから「猛虎一声」を使ったわけではあるまい。午年

この「猛虎一声」の詩句が引つかかっただけで、岩崎弥太郎のケースに加えて、もう一つの事例があるからである。それが大正十五年に書かれた、とある日記の一節。

「……武田は興味を抱いているようだ。同じ日記には「光輝ある三千年の歴史を有する帝国の運命盛衰は繋りて吾一人にある。親愛する七千万同胞の榮辱興亡は預りて吾一身にある」といった箇所もある。自己を顧みることなく他を難じるだけであれば、こうした勇士調の口吻も自ずと出てこよう。そして、そうした流れの中に「猛虎一声」の句が違和感なく収まっているのである岩崎や宇垣の捉え方が、当時としては、標準的だったとまでいうにはデータが少なすぎる。それでも原典とは風合いの異なる形で断片的な詩句が一人歩きしているケースということができる。

## 豪州時代 4 (86年10月、90年5月)

土田 裕

ホバート・タスマニア州の州都であるが人口二十万人で豪州では一番目の都市である。

豪州ではシドニーに次いで2番目に古い都市で近郊のリッチモンドには豪州最古の橋、牢獄などが残っている。タスマニアは豪州の南端にある島で、冬(6-8月)は雪も降り最低気温はマイナス2-3度となる。主産業は漁業、林業でウッドチップ以外にシートラウト、エビ、アワビなどを日本に輸出していた。ウッドチップの工場はホバートから車で3-4時間の山の中にあり、十条製紙の幹部が定期的に同工場を訪問される際には私も同行した。高速道路が無く、狭い山道を走っているとワラビーなどの動物の死骸が道ばたに転がっていた。タスマニアには本土にもいない動物(例えばタスマニア・デビル)が生息しており、広大な国立公園もいくつもあり、ワイルドライフを楽しみたい人には絶好の場所であり、前述の〇君などは夏になると毎年、家族で一週間くらい滞在していたようである。

キャンベラ・ニューサウスウェールズ州の南東部にあるが首都特別区(CCT)と

して独立している。この国の首都を決める際に人口1位のシドニーと2位のメルボルンが対立して決着がつかないので両都市の中間に作ったといわれる。人口は三万人、大半が役人と学生だと言われる。ところで意外なことに豪州は役人が異常に多く、国民の8人に1人が役人だと聞いた。私はメルボルンへ車旅行した時にキャンベラに立ち寄り、国会議事堂や国立美術館などを見学した。すべてが近代的で斬新な建物だが国会議員の数が少ないので議事堂はこじんまりしていた。歴史が新しいので美術館も見ると見るべきものは少ない感じがした。

## 「豪州三井物産社長」

私が着任した一九八六年当時の社長S氏は東大卒、食糧部門出身で英国三井物産勤務の経験もあり、キングズ・イングリッシュを話す英国風紳士であった。大変なヘビースモーカーで且つお酒も大好きであった。当時から豪州では国内便の飛行機は全て禁煙であった。S氏と一緒に出張すると空港に着くや否や真っ先に降り(ファーストクラスなので最初に出られる)待合室でぶかぶかやっておられた。会議中もたばこを手から離すことなく完全なチェーンスモーカーと言えた。シドニーから、メルボルン、ブリスベーンに出張の際は飛行時間が一時間位なのでまだ我慢できるらしいが、パースまでは約四時間かかるため、

どうにも我慢できず、まずシンガポールまで飛び(当時、国際線は喫煙できた)、そこからパースへ入ることを真剣に考えたそうである(もちろん実行はされなかったが)。また酒好きなので社長室の机にはウイスキー、バーボンなどが常備してあり、夕方六時ごろになると社長秘書から部長に電話で召集がかかり、社長室で小宴会が始まる。それも短時間で終わらず十時ごろまで続くのが常であった。日本からの重要客は社長宅で接待する。社長がお客さんのために水割りを作ってくれる際、手が震えてグラスがかたかた鳴り、酒がこぼれそうになるのではらはらしたことを覚えている。

仕事は各部長に完全に任せるタイプで細かなことは言われず大変やり易かった。一九八七年には平の取締役から常務に昇進し、翌年本社へ帰任されたが、惜しむらくは健康に恵まれず一九九一年にガンで亡くなった。タバコと酒の飲みすぎが影響したのだと思う。

一九八八年S氏の後に着任したT氏は慶大卒、非鉄部門出身、米国、カナダの勤務が長く所謂米国式英語が抜群にうまかった。奥様は元ミスユニバース5位になった人で確かにスタイルは良かったが昔、雑誌で見

た時の華やかな面影はなかった。ご主人もダンディだが、客先の接待については特にうるさい人であった。例えば、日本から重要客先について社長との会食の依頼がくると、客人の趣味、好みの食事など事前に聞いておけという。また招待するレストランの下見をして席順も決めておくよう指示があった。ある時、同氏の朋友である繊維のN常務がお見えになって社長宅で接待することになった。私は自分の車にN氏を乗せてホテルから社長宅まで行き帰りののだが、翌日T社長から散々文句をいわれた。いわく「日本では取締役には運転手付きの車が付いているのだから、こちらでもハイヤーをアレンジするのが当然ではないか」と。確かに言われてみればその通りかも知れないが、当の常務は大変気さくな人で終始ご機嫌で帰られた。長い物産生活で、この手の行儀にうるさい上司には度々お目にかかったが、これを反面教師として私自身が内地の部長になってから、部下の行儀について過度にうるさく言ったことはない。「物資・木材・繊維部」の項で触れたが香港の自転車メーカーとのJ/V契約交渉で、通常なら会社清算時のリスクは株のシェアに依りて負担するのが当然なのに同氏は香港側のリスクはメーカーも含めてすべて香港物産に持たせよと主張して譲らず、香港の副支店長と再三にわたって交渉を行い大変苦労した。

S氏にもそういう傾向はあったが、物産の幹部は自分の専門外分野については金額の如何を問わず臆病になる性向があった。

## 「思い出のグリーングラス」

駒田 明克

汽車から降りたら 小さな駅で  
迎えてくれる ママとパパ  
手を振りながら呼ぶのは  
彼の姿なの

思い出のグリーン・グリーン・グラス・  
オブ・ホーム

帰った私を迎えてくれるの  
思い出のグリーン・グリーン・グラス・  
オブ・ホーム

昔と同じの 我が家の姿  
庭にそびえる 榿の木よ  
子供のころに のぼった  
枝もそのまま  
思い出のグリーン・グリーン・グラス・  
オブ・ホーム

悲しい夢みて 泣いてた私  
ひとり都会で迷ったの  
生まれ故郷に立ったら  
夢が覚めたのよ  
思い出のグリーン・グリーン・グラス・

オブ・ホーム

笑顔でだれも迎えてくれるの  
思い出のグリーン・グリーン・グラス・  
オブ・ホーム

この「思い出のグリーングラス」という歌は、皆さん昔きつと聴かれたことと思います。1966年、トム・ジョーンズが歌って全米シングル・チャートで7週トップを続け、その後世界中で歌われました。

日本でも、森山良子が山上路夫の日本語詞で歌って大ヒットしました。

先日、車を運転中にカーラジオからこの懐かしい曲が流れてきました。懐かしく口ずさんでいると、家内から、「お父さん、この曲、死刑囚が明日死刑になる時の歌らしいですよ」と思わぬ言葉がありました。

家内は、いつもラジオ深夜便を聴いておりませんが、音楽に特に関心を持っている訳でもないのに、この曲の由来が頭に残っていたようです。

そこで、私なりにこの曲について調べてみました。

この歌がそれほど愛されたのは、美しく歌いやすいあのメロディーが理由でしょうが、それ以上に人の心をうったのは、歌詞にあります。

わが国では、この歌は、大都会での

夢に破れて帰郷したら、両親や昔の恋人たちが温かく迎えてくれ、家も、むかし登って遊んだ榿の木の以前のままだった：という内容になっています。

これだけでも、多くの人たちを感動させる歌になっています。

小生も、これまでなんとなくイギリスの田舎を勝手にイメージしながら、この美しい、少し哀愁を感じるメロディーを口ずさんできました。

しかし、日本語詞には省略されている3番があります。

原詞の訳です。

それから私は目を覚まし、私を取り囲んでいる灰色の壁を見回す。

私は、ただ夢を見ていただけだったと気が付く。

なぜなら、そこに看守と悲しげなようすの老神父がいたからだ。

明け方には、私は腕をとられて、彼らとともに歩いていくだろう。

そしてまた、ふるさとの青々とした草に触れることになるのだ。

そうだ、みんなは私に会うために、榿の木の下に下陰に来るだろう。

ふるさとの青々とした草の下に私を葬るときに。

ふるさとの小さな町に帰り、懐かしい人々や場所に出会ったのは、死刑囚が処

刑の直前に見た一瞬の夢に過ぎなかったというわけです。

日本語詞ではこの3番が省略されています。それに主人公を男から女に変えておきます。これは、あえて明るいメロディーに合わせた温かい歌にしよう意図したようです。

これまで私のように、勝手にイメージをふくらましていた者にとつて、この3番があるかないかで、歌のイメージがらりと変わることがよくわかります。のうてんき、鼻歌ではもう歌えませんが。

興味のある方は、YOU TUBEでトム・ジョーンズの原曲と森山良子の日本語詞の歌を聴いてみてください。

